

# 『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

## 聖徳太子

その2

先回から聖徳太子を取り上げ、『万葉集』の「龍田山の死人を見悲傷して作らず歌」が『鎮魂歌』の系譜に連なるものであることを述べた。今回は、『万葉集』の歌と異伝関係を持つ『日本書紀』の伝承を取り上げ、聖徳太子伝説が形成される次第をたどってみたいと思う。

まずは、『日本書紀』推古天皇二十一年十一月一日条を掲げる。

十二月の庚午の朔に、皇太子、片岡に遊行でます。時に飢者、道の垂に臥せり。仍りて姓名を問ひたまふ。而るを言さず。皇太子、視して飲食を与へたまふ。即ち衣裳を

脱きて、飢者に覆ひて言はく、「安に臥せれ」とのたまふ。則ち歌して曰はく、  
しなてる 片岡山  
に 飯に 飢て 臥せ  
る その 田人 あは  
れ 親 無しに 汝  
生り けめ や さ  
竹の 君は や 無き  
飯に 飢て 臥せる  
その 田人 あはれ  
とのたまふ。

辛未に、皇太子、使を遣して飢者を視しめたまふ。使者、還り来て曰さく、「飢者、既に死りぬ」とまをす。爰に皇太子、大きに悲びたまふ。則ち因りて当処に葬め埋ましめ、墓固封めしめたまふ。数日之後、皇太子、

近習の者を召して、謂りて曰はく、「先日、道に臥せし飢者、其れ凡人に非じ、必ず真人ならむ」とのたまひ、使を遣して視しめたまふ。是に使者、還り来て曰さく、「墓所に到りて視れば、封め埋みしところ動かず。乃ち開きて見れば、屍骨既に空しくなりたり。唯し衣服のみ置みて棺の上に置けり」とまをす。是に皇太子、復使者を返して、其の衣を取らしめたまひ、常の如く且服たまふ。時人、大きに異しびて曰く、「聖の聖を知るも、其れ実なるかも」といひて、途惶る。

当該の記事を見ると、先回取り上げた『万葉集』の歌の詠われた状況と異なることに気が付く。『万葉集』では「龍田山(奈



聖徳太子の愛馬「黒駒」像と橘寺本堂

良県生駒郡」とあつた歌の場が、「片岡(奈良県北葛城郡王寺町)」となつており、聖徳太子は「死人」を見たはずが、『日本書紀』では「飢者」とあつて、太子は「この「飢者」に飲食を与えただけでなく、自ら「衣裳」を与えてもいる。そのうえ、太子は「片岡山」に飢えて臥せている哀れな農夫よ、親がいなくて生まれてきたわけではなからう、仕える主人はいないのか、飢えて臥せている農夫よ、嗚呼」と「飢者」の「鎮魂」を詠うのである。

そして、『日本書紀』の言説には後日譚がある。「飢者」と出会つた翌日

太子は使いを遣わしてその人を見に行かせたばかりか、亡くなつていたその人を丁重に葬つたという。しかも、数日後、今一度その墓を見に行かせ、「屍骨」が無くなつていることを確認させる。ここには、「必ず真人ならむ」という太子の確信があつた。「真人」は道教でいう「仙人」を指し、真理を悟つた人のことをいう。また、当該の「飢

者」のように死して後、登仙することを「尸解」といひ、仙人に至る手段とされている。

こうした二連の文脈を『日本書紀』は「聖は聖を知る」として太子の儒教的な太子像を描くのみならず、太子の聖性を称賛するエピソードとしている。ではなぜ、『万葉集』と『日本書紀』の記述がこれほど異なるのか。実は、この場合、いずれが正しいといった見解はあたらぬ。どちらも伝承としては正しいのである。これは、伝説が形成されていく次第と考えねばならないだろう。その道筋は、例えば、歌を詠うという行為の他に「飢者」に食物や衣服を与えると言つたことや、この「飢者」を「聖(仙人)」と看破していることなどがあげられよう。『万葉集』と『日本書紀』は同時代の作品であるから、その差異は「伝承の形成」というところまで至らないかもしれない。しかし、『日本書紀』成立

からおよそ百年後の仏教説話集『日本書異記』第四縁にも「聖徳太子の異しき表を示したまひし縁」として次のような話が載る。

皇太子鶴の岡本の宮に居住し時に縁有りて宮より出で遊観に幸行す。片岡の村の路の側に、毛有るかたるの人、病を得て臥せり。太子見して、攀より下りたまひて、俱に語りて問訊ひ、著たる衣を脱ぎたまひ、病人に覆ひて幸行しき。遊観既に訖りて、攀を返して幸行すに、脱ぎ覆ひし衣、木の枝に挂りて彼のかたるは無し。太子、衣を取りて著たまふ。有る臣の白して曰さく、「賤しき人に触れて穢れたる衣、何の乏びにか更に著たまふ」とまをす。太子、「住めよ。汝は知らじ」と詔りたまふ。後にかたるの人他処にして

死ぬ。太子聞きて、使を遣はして殯し、岡本の村の法林寺の東北の角に有る守部山に墓を作りて収め、名づけて入木墓と曰ふ。後に使を遣はし看しむるに、墓の口開かずして、入れし人無く、唯歌のみ作り書きて墓の戸に立てたり。歌に言はく、

鶴の富の小川の絶えばこそわが大君の御名忘れぬといふ。使還りて状を白す。太子聞き嘿然りて言はず。誠に知る、聖人は聖を知り、凡人は知らず。凡夫の肉眼には賤しき人と見え、聖人の通眼には隱身と見ゆと。斯れ奇シク異しき事なり。

ここには、太子の詠つた歌はなく、「かたみの人(病人)」が太子の心遣いに感謝するかのような歌が記されている。次号で詳しくみることにしよう。

## 高尾山の昆虫

### ウバタマコメツキ

93

他人のそら似という言葉がありますが、虫の世界でも科が違ふのに何故か似ている種があります。



タマムシの仲間にはウバタマムシと言う地味で渋い大型種がいて、派手なヤマトタマムシがオス、ウバタマムシはそのメスと思われがちなのですが明らかに別種です。

ウバタマムシは衰弱したマツの樹上等でよく見かけますが、その中に同じくらいのサイズでよく似ているウバタマコメツキがいることに気づきます。この二種を並べて比較すると違いは顕著で間違えることはありませんが、野外で見つけた時はとっさにウバタマムシだと思つてしまいがちです。

ウバタマコメツキは小型種が多いコメツキの中では大型種で、サビキコリ亜科に属しウバタマムシ同様に地味な配色をしています。

ウバタマムシと思つて容器に入れて飼つていたら、「コン」という音を立てながら飛び跳ねる本種を見て、びっくりした人もいるかも知れません。

似ているメリットなどなくただのソックリさんかと思つていましたが、幼虫はウバタマムシの幼虫を相当数捕食しているらしく、赤ずきんちゃん狼を思わせます。

(撮影・文松島 孝)